

# 観光集落の 再生と創生

温泉・文化景観再考

戸所 隆 著



海青社

# Revitalizing Communities through Tourism

by

TODOKORO, Takashi



海青社

# 観光集落の 再生と創生

温泉・文化景観再考

戸所 隆 著



海青社

## はじめに

日本は明治時代の産業革命以来、100年以上にわたり欧米先進諸国に追いつき追い越すべく中央集権体制による国づくり・地域づくりを推進してきた。その結果、首都東京を頂点とする階層ネットワーク型国土構造の高度工業化社会が構築され、経済的に豊かな国となった。しかし、1980年代になると情報革命が急速に進展し、人々の価値観も大きく変化した。

情報革命により日本社会は明治維新に匹敵する大きな構造転換を迫られている。すなわち、工業化社会から知識情報化社会への転換である。知識情報化社会の構築には、東京を頂点とする階層ネットワーク型国土構造をコンピュータ・ネットワークに対応できる水平ネットワーク型国土構造に変えねばならない。そのためには、東京を機関車にして国づくりを進める中央集権型政治・経済・文化構造を地方分権型・地域主権型に転換する必要がある。また、バブル経済の崩壊をはじめとする様々な政治・経済の混乱を経て、多くの人々に認識され、人々の価値観も変化してきた。その結果、多くの人々が行ってみたい・暮らしたいと思う地域も変わりつつある。

本書は以上の時代背景に基づき、都市地理学と地域政策学の視点から、既存の観光集落の再生と既存集落の地域資源を活用した新たな観光集落の創生に関する研究である。既存の観光集落の再生としては、伝統的温泉集落である群馬県渋川市の伊香保温泉と、かつて榛名講で賑わった榛名神社・社家町(群馬県高崎市榛名山町)を例とする研究である。

伊香保温泉は、年間約130万人の宿泊客を有する全国スケールの温泉観光地であるが、宿泊客が最盛期の約170万人から約40万人も減少し、構造転換を迫られていた。その再生をいかにすべきか、温泉経営者など町衆や地元自治体による再生計画に研究者として関与した記録と実地調査結果をまとめたものである。

また、榛名神社・社家町はかつては100軒以上の宿坊が建ち並び全国から信者が参集した榛名山中にある観光集落であったが、宿坊も10数軒に減少し、

限界集落化していた。この集落を観光集落として再生すべく、地元住民・自治体と著者の研究室・地域外有志が一体となって7年間取り組んできた。活動の結果、榛名神社の本殿を始めとするほとんどの建造物は国の重要文化財の指定をうけた。また、社家町の宿坊も3軒が国の有形登録文化財となった。さらに、蕎麦による町おこしや重要文化財となった神楽殿にて一流奏者による「幽玄の杜音楽会」を開催するなど、地域資源を活かした再生事業を行っている。この研究は、著者の約20名のゼミ生が毎年、年間を通して榛名神社・社家町で、観光ガイドを行いながら様々な調査研究活動を行っている記録の一端でもある。

既存集落の地域資源を活用した新たな観光集落の創生に関しては、前橋市総社町の山王集落を取り上げた。この集落は、これまで観光的な視点から取り上げられたことのない都市近郊の農村集落である。しかし、経済力のある豊かな集落で、昭和30年代まで盛んであった大型養蚕農家の建物が他に見られない形で集積しており、その保存状態も良好である。また、養蚕農家を北風から守る防風林もその多くが健在である。さらに、山王集落から徒歩圏には東国文化の中心・総社古墳群や上野国府・国分寺跡、山王廃寺跡など多くの文化財が存在する。こうした地域資源の保存と活用をすべく、新たな観光集落の創生への提案として研究したものである。

本研究にはいずれも、著者のゼミ生を中心に規模の大きなアンケート調査等を実施している。協力して頂いたゼミ関係者を始め、地元関係者、自治体関係者に厚く感謝申し上げたい。なお、本書で使用した写真は、すべて著者の撮影したものである。

2009年夏

戸所 隆

# 観光集落の 再生と創生

温泉・文化景観再考

目次

はじめに .....	1
<b>序 章 文化資源を活かした創造的・地域多様性社会の構築</b> .....	<b>7</b>
1. 人々が行ってみたい・暮らしたいと思う地域 .....	7
2. 文化芸術を活かした地域ブランド化と地域再生 .....	8
3. 地域資源を活かした多彩でコンパクトなまちづくり .....	8
4. 町衆による地域ブランドづくりと土地利用・景観形成制度の必要性 .....	10
5. 地域づくりと地域政策形成の基本 .....	11

## 第 1 部 伝統的温泉集落の再生

<b>第 1 章 伝統的温泉観光地・伊香保の課題と再生の必要性</b> .....	<b>16</b>
1. 観光概念の変化とホテル・旅館経営者の意識改革の必要性 .....	16
2. 自然・人文環境に恵まれた数百年の伝統をもつ伊香保温泉 .....	18
3. 伊香保温泉における観光客の動向と交流人口への展開 .....	20
4. 町衆の活躍する伊香保温泉 .....	24
5. 伊香保温泉研究の目的 .....	26
<b>第 2 章 伊香保中心街の再構築による温泉観光地の活性化</b> .....	<b>29</b>
1. 伝統的温泉観光中心街再生への仮説 .....	29
2. 伊香保温泉の地域資源と観光客の行動 .....	32
3. 伊香保温泉の目指すべき街のイメージ .....	38
4. 石段街の印象とファッション街構築に対する賛否 .....	42
5. 温泉観光地活性化に資するまちづくり方策 .....	49
<b>第 3 章 ホテル・旅館経営者からみた伊香保温泉の実態と再生のあり方</b> .....	<b>51</b>
1. 伊香保温泉におけるホテル・旅館の経営実態と特性 .....	51
2. ホテル・旅館経営者としての基本コンセプト .....	57
3. 宿泊温泉施設・料理飲食への配慮 .....	61

4. 経営者としての温泉街・まちづくりへの対応 .....	67
5. 伊香保周辺の重視すべき観光資源 .....	75
6. 伝統的大規模温泉観光地特有の問題点 .....	76
<b>第4章 伊香保温泉街におけるパーク・アンド・ライド・システムの構築方策 .....</b>	<b>81</b>
1. パーク・アンド・ライド・システムの必要性 .....	81
2. パーク・アンド・ライド社会実験協力者の性格 .....	85
3. パーク・アンド・ライド社会実験に対する評価 .....	87
4. 自動車を排除した歩いて楽しい温泉街を望む観光客 .....	93
5. パーク・アンド・ライド・システム構築の方向性 .....	96
6. 再生方策を活かす努力と実績 .....	102
<b>第2部 門前集落の再生と創生</b>	
<b>第5章 変革期における榛名神社・社家町の再生戦略 .....</b>	<b>106</b>
1. 榛名神社・社家町を取り巻く環境変化 .....	106
2. 榛名神社・社家町再生の課題 .....	110
3. 町役場主導による再生計画の初期始動 .....	111
4. 社家町活性化委員会(杜の応援団)設置と広報活動の開始 .....	113
5. 社家町活性化委員会3分科会の成果 .....	115
6. 学生による活動と新たな展開 .....	121
7. アンケートから見た来訪者の求める再生方向 .....	124
8. 伝統・財産の継承と創造による住民主導の再生戦略 .....	132
<b>第6章 音楽会を核とした榛名神社社家町の再活性化政策 .....</b>	<b>135</b>
1. 再生事業のシンボルとしての「幽玄の杜音楽会」 .....	135
2. 「幽玄の杜音楽会」来聴者の属性と来聴回数 .....	137
3. 「幽玄の杜音楽会」の認知媒体と来聴理由 .....	139
4. 「門前そば」に対する「幽玄の杜音楽会」来聴者の評価 .....	141
5. 音楽会実施上の課題とその改善策 .....	144

6. 音楽会来聴者の社家町再生への認識と改善策 .....	151
7. 地域活性化政策の成果と課題を踏まえた新たな展開方向 .....	153

### 第 3 部 観光集落の創生

<b>第 7 章 観光集落創生に向けた地域資源の再認識・再整備 .....</b>	<b>156</b>
1. 個性的地域づくりに必要な「大都市化分都市化型都市構造」 .....	156
2. 分都市型観光集落の創生条件 .....	158
3. 分都市としての前橋市総社地区の地区特性 .....	160
4. 観光集落創生への試論 .....	166
5. 観光集落創生推進機構としての「まちづくり協議会」の設立 .....	171
<b>第 8 章 文化的景観としての養蚕農家保存活用による観光集落創生 .....</b>	<b>173</b>
1. 文化景観としての前橋市総社地区・山王集落 .....	173
2. 養蚕集落景観を維持する山王集落の特性と研究方法 .....	176
3. 地域の歴史性や文化的景観に関する認知度と関心度 .....	179
4. 大規模養蚕農家群保存に関する住民意識と保存方策 .....	183
5. 文化的景観の活用による観光集落創生政策 .....	188
6. ビジター産業開発による観光集落の創生 .....	193
あとがき .....	197
索 引 .....	199

---

# 序 章

## 文化資源を活かした 創造的地域多様性社会の構築

---

### 1. 人々が行ってみたい・暮らしたいと思う地域

バブル経済崩壊後の日本は、過去 100 年以上続いてきた工業化社会型国家システムを、知識情報化社会型国家システムへと構造転換させる努力をしている。知識情報化社会における富の源泉は、「知恵と情報」である。高度技術社会にあっては技術的優越性ととも、デザインなど感性的な優越性が問われるようになってきた。ものづくりや物の輸出入の重要性は変わらないものの、より良いものづくりにはそれを可能にする知恵と情報の集積が不可欠である。この知恵と情報は、人間の交流によって生み出される。従って、国の内外を問わず、いかに多くの人が交流できる環境を創るかが、知識情報化社会における発展の鍵となる。

こうした時代において多くの人々が行ってみたい・暮らしたいと思う地域は、単に景観が美しかったり珍しいものがある地域ではない。それらに加えて様々な知識・情報が活発に交流・結節し、新しい知識・情報・知恵・価値を生み出す地域である。また、それらが備わった地域が経済発展の極になる。今日停滞傾向にある伝統的観光地は、そうした視点から再生を考える必要がある。また、これまで観光的価値が認められなかった地域においても、土地利用・景観に優れ、知的刺激を与えるメッセージ発信のできる地域は、新たな時代の観光集落として創生できよう。

知識情報社会においては、知的刺激を与えるメッセージ発信として歴史遺産や芸術活動、付加価値の高い消費購買活動などが地域の発展に大きな役割を持つ。とりわけ観光集落にその傾向が強い。本書ではかかる視点に立ち、美しい

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 第 1 部

# 伝統的温泉集落の再生

---

# 第1章

## 伝統的温泉観光地・伊香保の 課題と再生の必要性

---

### 1. 観光概念の変化とホテル・旅館経営者の意識改革の必要性

かつての日本社会は非日常と日常、ハレとケがはっきりしており、遊びと仕事も明確に区別してきた。そのため、日本では今日でも「遊び＝観光」のイメージが強く、観光地を遊びの場と認識する人が多い。それは肉体的にも精神的にも厳しい毎日の仕事から開放され、非日常空間に存在するだけで「旅」の意義を見出し、内面的生き甲斐を感じる人々の多かった時代の産物といえる。

しかし、今日では非日常と日常、ハレとケ、遊びと仕事の間に明確な区別がなくなってきた。そのため、旅行者の意識・行動様式も大きく変化した。お仕着せの観光資源ではなく、その地域が持つ独特の雰囲気や魅力を求めて自ら行動する人々が増えた。それはこれまでの観光地の概念では観光地になり得ない地域でも、そこで交流する人・モノ・情報に魅力があり、地域資源を発掘できれば観光地として脚光を浴びることを意味する。

旅行者の意識・行動様式の変化は、「旅」の形態を大きく変えた。産業革命までの農業時代では護国安寧と五穀豊穡を願う神社仏閣への参詣が「旅」の中心であり、非日常の観光空間を生み出した。伊勢詣はその典型であり、神社仏閣に近接する温泉は農閑期の湯治場として日本型リゾートの原型を築いた。また、講などが組織化され、観光地も固定社会に適した市場圏を形成していた。

産業革命によってつくられた工業化社会は、人々の移動空間を拡大した。神社仏閣以外にも景勝地に多くの観光地が開発され、避暑地や別荘地も形成され、観光空間は多様化した。しかし、規格大量生産を旨とする工業化社会の観光地や観光行動には、一定の型が見られた。企業の慰安旅行や農協の団体旅行

このプレビューでは表示されないページがあります。

---

## 第2章 伊香保中心街の再構築による 温泉観光地の活性化

---

### 1. 伝統的温泉観光中心街再生への仮説

工業化社会において団体客で賑わった伝統的温泉観光地は、知識情報社会への転換で、その構造転換を迫られている。

伝統的な温泉観光地の多くは、自然湧出の温泉源を中心に、湯治場として発達した。こうした温泉場の湯量は多く、自然環境にも恵まれたところが多い。そのため、かつて近隣の湯治客を主要な顧客として発展した多くの秘湯は、工業社会において近代的な温泉観光地への転換した。それは所得の増加による生活水準の向上と余暇時間の増加によるところが大きい。特に交通条件に優れた温泉観光地は、企業や農協を中心とした慰安旅行や各種団体旅行の受け皿として観光都市へと成長した。いわゆる大量生産・大量消費型温泉観光地の形成であり、かかる動向はバブル経済の崩壊まで続いた。そこでは多くの観光客を一括して受け入れ、宴会やその後のレジャーや土産物購入まで旅館・ホテル内ですべて完結できる顧客の囲い込みへと進んだ。

以上の流れにおいては、規模の大きな旅館・ホテルほど有利となるため、大規模な高層ビルの建ち並ぶ温泉観光地が形成された。その結果、かつては湯客で賑わった温泉街は、大型高層旅館・ホテル内の売店・飲食店・レジャー施設に客を奪われて閑散としている。旅館・ホテルの立体高層化で個々の建物が街化することによって、中心街が衰退してきたのである。

こうした動きは、大量生産・大量消費を旨とする工業化社会における必然の結果であった。しかし、バブル経済の崩壊以降における情報革命の進展によって、知識情報化社会が構築された。成熟した知識社会にあっては、様々な知的

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 第3章

# ホテル・旅館経営者からみた伊香保温泉の実態と再生のあり方

### 1. 伊香保温泉におけるホテル・旅館の経営実態と特性

#### (1) 伝統派と新興派からなる地場資本主体の経営

伊香保温泉は延喜式内社の伊香保神社(写真3-1)への石段を中心に形成された400年以上の歴史を持つ伝統的温泉地で、地場資本のホテル・旅館が圧倒的に多い。2004年に伊香保町温泉街に立地する全てのホテル・旅館を対象に聴き取り・アンケート調査をした際、回答した50社中45社が本社を伊香保に置き、他の3社も群馬県内に本社があることがわかった<sup>1)</sup>。これは木暮・千明・岸・大島・島田・望月・後閑の7氏が温泉宿経営をしながら、郷土として集落を支配し、計画的に温泉街形成を行ってきた(写真3-2)伊香保の歴史によるところが大きい<sup>2)</sup>。

伊香保温泉の「小間口制度」は、湯元から引いた一本の大堰に温泉引湯口(小



写真3-1 延喜式内社の伊香保神社

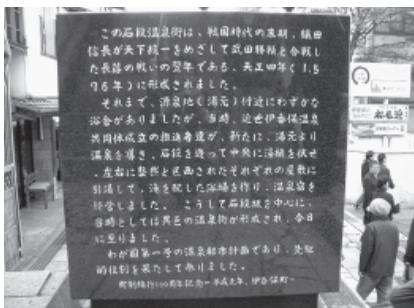


写真3-2 石段街にある温泉都市計画第1号の碑

このプレビューでは表示されないページがあります。

---

## 第4章

### 伊香保温泉街における パーク・アンド・ライド・システムの構築方策

---

#### 1. パーク・アンド・ライド・システムの必要性

産業革命以降の地域づくりは、交通機関の発達に大きく影響されてきた。特に、1960年代後半に始まる自家用車の普及は、それまでの鉄道やバス・市街電車などの公共交通と歩行空間に優れたまとまりある街並を大きく変貌させた。すなわち、郊外化の著しいアメリカ型都市形態が出現してきた。特に日本では、工業化社会の構築に伴う人口増加もあって市街地が急に拡大し、郊外の商業業務地開発で中心商業地が衰退している。

こうした工業化社会の都市化現象も、1980年代に始まる情報革命によって新たな局面を迎え、時代の変化に対応した都市のあり方や国土構造の変革が問われるようになった。すなわち、財政基盤が弱体化する中で、分権化やこれまで経験したことのない少子・高齢化が進み、新たな都市開発手法が求められている。それには、地域資源の再発見や既存設備の活用による効率の良い都市再生が必要となる。また、従来の年輪型(拡大型)都市づくりを積み重ね新陳代謝型(安定型)に転換させ、コンパクトで安定した市街地形成を図らねばならない。

積み重ね新陳代謝型のコンパクトなまちづくりの条件としては、①誰もが歩きたくなる街としての環境整備、②日常生活への利便性・快適性の確保、③公共交通によるネットワーク、④町衆の活躍できる交流空間、⑤求心力のある高質・高密度な積み重ね空間としての中心街などがあげられる。この中心街には、人々が一寸おしゃれをして集い、互いに歩き回ること、あたかもファッション・ショーの中にいるような魅力が求められる。

日本の伝統的な都市景観は、価値の低いものとされ、明治以降の近代的な

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 第2部

### 門前集落の再生と創生

## 第5章 変革期における榛名神社・社家町の 再生戦略

### 1. 榛名神社・社家町を取り巻く環境変化

榛名神社は群馬県の中央部に聳える上毛三山の一つ榛名山(標高 1,448 m)の南斜面、標高 900 m の所に鎮座する(写真 5-1)(旧群馬郡榛名町・2006 年 10 月に高崎市と合併)。また、榛名神社の門前町である社家町は、本殿から木立に囲まれた榛名川の清流に沿う参道を約 550 m 下った標高約 820 m の位置にある。

社家町は JR 高崎駅・前橋駅から共に直線で約 20 km、自動車で約 1 時間の距離である。また、長野新幹線・安中榛名駅からは直線距離で約 10 km と近く、榛名山東斜面の伊香保温泉には自動車で榛名湖経由約 25 分で結ばれる。榛名神社へは自家用車での来訪者が圧倒的に多いが、乗合バスも高崎駅ー榛名湖に 1 時間ごとに運行されている(図 5-1)。

宿坊や土産物店・食堂などが並ぶ社家町(写真 5-2)は、神官、宿坊経営者、土産物・食堂経営者などの居住地でもあり、県道安中榛名湖線沿いと歴史民俗



写真 5-1 榛名神社本殿



写真 5-2 榛名神社の門前町・社家町

このプレビューでは表示されないページがあります。

---

## 第6章 音楽会を核とした榛名神社社家町の 再活性化政策

---

### 1. 再生事業のシンボルとしての「幽玄の杜音楽会」

榛名神社・社家町へは農業従事者を中心に「榛名講」等の参詣者や観光客が、今日でも年間30万人訪れる。しかし、産業構造の変化による「講」の減少で前町である社家町の賑わいは減退した。社家町の人々は自信を喪失し、訪問客も魅力を感じなくなっていた。その結果、店舗廃業や後継者不足をもたらし、高齢化率57%が示すように地域社会を崩壊の危機に陥れた。

こうした集落崩壊のスパイラルから抜け出すには、榛名神社・社家町の流れを転換させ、多くの人々を榛名神社・社家町へ吸引するには、素晴らしい自然景観や文化景観とその価値や地域の魅力を多くの人々に認知してもらわねばならない。また、若年層の流入増を図り地域を再活性化するには、関係者の知恵と熱意が重要で、それを戦略的に実現する政策が不可欠となる。以上の視点で検討した結果、多くの人々を吸引し感動を与えるイベントとして、プロのクラシックとジャズの演奏会を国の重要文化財・榛名神社神楽殿で2002年から始めた。

荘厳なたたずまいの神域での演奏は、クラシックやジャズなどのジャンルを問わず、人々を魅了した。特に、夕暮れから始まる夜の部では、ライトアップされた神楽殿が新緑や紅葉の中に浮かび上がり、他では味わえない「幽玄の杜音楽会」となっている。この「幽玄の杜音楽会」は、社家町住民等関係者、旧榛名町役場担当者、社家町再生の専門的支援者の結束した努力の賜で、社家町活性化のシンボリック事業であり核的事业である。なお、音楽会の演奏は5月末の土・日曜日の昼と夜、計4回となっている。2009年の場合、クラシックコン

## 第3部

### 観光集落の創生

---

どこのまちにも観光集落創生の芽はある。まだ何ら観光集落とは言えない平凡なまちを取り上げ、観光集落創生への視点やその方法について考えてみる。

---

## 第7章

# 観光集落創生に向けた地域資源の 再認識・再整備

---

### 1. 個性的地域づくりに必要な「大都市化分都市化型都市構造」

現代都市は技術革新やそれに伴う国家政策の転換に対応し、地域の実情にあった新たな都市構造を構築しなければならない。そのため高度知識情報化社会の構築を目指すには、従前の閉鎖・階層型ネットワークからコンピュータ・ネットワークに規定された新たな開放・水平型ネットワークを基本とする「大都市化分都市化型都市構造」へ転換する必要がある(図7-1)<sup>1)</sup>。

“分都市化”とは、都市が多核型のまとまった一つの都市へと成長(大都市化)しつつ、それぞれの核を中心に自立性の高い地域(分都市)が析出されてくる過程とその結果の状態を意味する著者の造語である。分都市は大都市化する都市全体を代表する分都市(都心)とその周辺に位置する多数の分都市に二分される。しかし、それぞれの分都市の自立性は高く、個性豊かな分都市間に上下関係はない。情報社会では個性豊かな分都市が相互に水平ネットワークする中で全体としても個性的で力のある大都市を創造していく必要がある。

それはなぜか。かつての東京は都心—副都心—副副都心—……と階層的で閉鎖的な垂直ネットワーク型都市構造であった。また、年輪のごとく都心から外に向かって、都心周辺部・周辺市街地・郊外と地帯構造化されていた。こうした縦型社会では最も力のある中心地域が都市圏全体を支配し、結果として都市内の多様な地域性を喪失させてきた。しかし、現在の東京はそれと異なる構造に転換し、これまで以上に都市力を増強しつつある。それは、今日の東京は外から見れば一体化した巨大都市であるが、東京を構成するそれぞれの地域は自立的で個性豊かな分都市化を進めているためである。すなわち、東京は新宿・

このプレビューでは表示されないページがあります。

---

## 第 8 章

# 文化的景観としての養蚕農家保存活用による 観光集落創生

---

### 1. 文化景観としての前橋市総社地区・山王集落

人間はこの世に生を受けた限り、望むと望まないに係わらず、生活空間の自然環境を活かしてたくましく生き抜こうと努力する。様々な自然環境の中で展開される人間の営みは、結果として人間と自然による共同作品といえる地域性豊かな景観を創造してきた。それは自然景観と人工景観が織りなす総合的な景観で、一定の空間・自然環境の中における人間活動の蓄積された結果といえる。すなわち、そうした景観は地理的空間における人間活動の歴史的な積み重ねとしての地域文化の具象である。人間が生存する地域すべてにこうした景観は創造されるが、個々の景観が他者に訴える力には、強弱がある。

ところで、文化財保護法の第 2 条に「文化的景観」という用語がある。この「文化的景観」は「地域における人々の生活又は生業及び当該風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」と定義される。この定義によれば、文化的景観は決して従来型の名勝地・景勝地だけを指すのではなく、どこにでもある人間と自然による共同作品としての地域性豊かな景観を意味すると解釈できる。

こうした景観を文化的景観として保護する動きが 20 世紀末から世界的に強くなってきた。ユネスコの世界遺産の理念も人間と自然が織りなす生活文化を基礎とした文化的景観を、人類の遺産として保護しようとするものである。かかる視点から身近な地域を見渡した時、地域には様々な文化的景観があることに気づく。また、地域政策学の視点から見ると、文化的景観は地域の活性化を促す資源であり、それを核にコミュニティの再生も図れると考えられる。

このプレビューでは表示されないページがあります。

## あとがき

著者は1996年春まで30年間にわたり京都の立命館大学地理学教室で研究・教育生活を送ってきた。1996年に郷里の高崎経済大学に日本最初の地域政策学部が立ち上がるに際して、地理学を政策に活かす形で教育研究活動に当たって欲しいと依頼され、30年ぶりに郷里に戻った。そこで、研究のスタイルを立命館大学で行ってきた地理学の基礎研究中心に応用研究もする形から、基礎研究を踏まえつつ応用・開発研究中心へとシフトすることにした。また、それに基づいた教育を行うことで、地理学を活かした地域政策研究・教育に貢献するべく努力してきている。

この結果、立命館時代に比べ、国・地方自治体における政策立案や地域再生事業への関わりなど、実社会での研究教育活動が格段に増えた。また、上越市役所では非常勤特別職の上越市創造行政研究所長として研究面から現実の地方行政の一端を担うことで、実践的な研究・教育のみならず地域社会への関わり方も研究しつつある。同時にこうした経験や研究をいかに地域政策教育に役立てるかは、高崎経済大学地域政策学部に赴任以来の課題であり、今日まで試行錯誤を繰り返してきた。

本書の作成に用いた研究内容は、そうした私の研究・教育・地域貢献活動の成果をゼミ教育に活かすべく活動してきた記録の一部である。すなわち、本書は観光を中心にした地域再生を目的に、ゼミ生と共に大学周辺地域の問題点を発見し、その解決のために現地調査・アンケート等などの様々な調査研究活動を行い、実社会に政策提言してきたものを中心にまとめている。

著者をはじめ多くの学生が、長い期間にわたり現地調査を行う中で、調査地域の関係者からは多大なご支援を頂いた。地域住民をはじめ関係自治体の担当者、商工会議所など各種団体やシンクタンクの方達、またボランティア活動でご支援頂いた人々、多くの方々にご協力頂いた。その数があまりに多いため、ここではお一人お一人のお名前を記すことができないことをお詫し頂きたい。ご協力頂いた方々にここで改めて御礼申し上げる。なお、研究成果を地域社会

に還元することが私たちのできる御礼と思い、学生共々、今日まで努力してきており、今後もその気持ちで教育研究活動を続けたいと念じている。

最後に、本書の研究は著者一人で行えるものでなかった。著者が指導したとはいえ、高崎経済大学地域政策学部戸所ゼミ(都市地理学・都市政策学研究室)の学生・大学院生の活動によるアンケート調査等の賜である。以下、本書に関係する調査研究に参加した学生・大学院生の氏名を記して感謝の意を表したい。

2009年初秋

戸所 隆

- <2003年度卒> 王 崢・小野寛恵・金子憲介・小嶋竜矢・鈴木 誠・辻 賢和・永倉裕子・湯村茂和・横畑沢磨・吉田周平
- <2004年度卒> 天沼克之・梅木由維・大沼真樹・工藤 彩・中島健太郎・丸山昌希・吉田恵理菜・若林 彰・割田明子
- <2005年度卒> 大山 敦・楠本 圭・小林興子・佐久間良一・佐原正基・清水一樹・田畑光輝・宮一洋子・吉田新太郎・吉田玲佳・渡部麻衣子
- <2006年度卒> 五十嵐絵美・伊藤駿介・伊藤 剛・金山祐樹・金賀洋介・工藤 岬・関口大輔・園部 真・竹田枝里子・橋本 恵・深澤梨絵・藤田知宏
- <2007年度卒> 秋山卓也・長谷川知哉・猪俣順子・遠藤公師朗・加野智音・小林政善・佐々木絵里・澤里神奈・市東奈緒・信澤祐介・堀越隆彦・間宮直樹
- <2008年度卒> 秋葉林一・朝夷修平・新井恵利・阿波連朋子・片倉理恵・木村楨吾・小林由季・佐藤澄直・島津啓吾・田村恵梨紗・星野祐一
- <2009年度4年生> 池田知代・今井大揮・大村 翔・工藤紫織・斎藤美由貴・齋藤美佳・齊藤慶太・田中美帆・都丸勝己・長手一平・渡邊俊哉・須藤 菜美
- <2009年度3年生> 浅野周平・天内悠子・小野智喜・佐藤知香・鈴木将也・角田悠輔・福田圭佑・古郡 享・堀口貴広・由井邦子・李 彦喜・高橋良輔
- <大学院修了者> 新保正夫・田中清明・女屋勝啓・新井規之・後藤哲範・岡田修一・王 崢・稲垣昌茂・鈴木 誠・埴原朋哉・田中慎一・三橋浩志・横畑沢磨・五十嵐靖・石田哲保・鈴木 智・王 薇

# 索引

## ア 行

アウトレット・モール .....	47
慰安旅行型団体客 .....	17, 18
域内市場産業 .....	160
石段街 .....	24, 34, 38, 42, 47, 56, 69, 72, 94
板塀 .....	118, 130, 152
板塀化 .....	130, 152
引湯権 .....	24, 52, 57
ウインドー・ショッピング .....	158
駅勢圏 .....	170
延喜式内社 .....	51, 107, 110
オープンガーデン .....	187
黄金の湯 .....	96, 102
奥座敷 .....	60
温泉情緒 .....	97
温泉都市計画 .....	18

## カ 行

外国人観光客 .....	60
開放・水平ネットワーク型 .....	9
神楽泉 .....	121, 130, 136, 142, 143, 149
檜ぐね .....	177, 181
活性化委員会 .....	112, 118, 133
カラー・イメージ .....	41
カラー・コーディネート .....	96
観光立国 .....	26, 63, 78
官民協働 .....	103
規格大量生産 .....	16
危機管理 .....	150
城崎温泉 .....	72
共同運行 .....	99
近代化遺産 .....	168
口コミ .....	139
国史跡 .....	190

国指定史跡 .....	108
国登録有形文化財 .....	152
暮らしぶり .....	9
車社会 .....	60
黒川温泉 .....	68
群馬交響楽団 .....	136
景観計画 .....	50
景観形成 .....	68, 71, 129, 133, 137, 152, 167
景観形成制度 .....	68
景観の統一 .....	152
結節性 .....	192
限界集落 .....	110
公共交通 .....	34, 36, 60, 82, 88, 116, 147, 159, 171, 191, 192
小型送迎バス .....	101
〈五感〉の魅力 .....	9
顧客圏 .....	86
顧客ニーズ .....	65
顧客満足度 .....	77
越屋根 .....	174, 177, 183
越屋根付き大規模養蚕農家 .....	182, 184, 186
小間口制度 .....	24, 51
御用邸 .....	19, 77
コンパクトなまち .....	170
コンパクトなまちづくり .....	8, 31, 81

## サ 行

サイン計画 .....	36, 61, 101, 118, 119, 125, 126, 128, 147
砂防堰堤 .....	152
蚕糸業 .....	174, 188
市街電車 .....	77
自家用車普及率 .....	82
地場資本 .....	24, 25, 51, 52, 176
地場食材 .....	66
渋川市 .....	50
資本の論理 .....	31, 78
社会実験 .....	85, 87, 91, 93, 98

社家町 .....	106
シャトルバス .....	83, 87, 101, 102
集客圏 .....	125
修景 .....	116, 129
収容人員 .....	54
重要文化財 .....	107, 125
宿坊 .....	112, 118, 121, 130, 131, 152
宿坊料理 .....	120
消費者の論理 .....	27, 78, 132
心象風景 .....	94
神代神楽 .....	121
新陳代謝 .....	183, 192
人的支援体制 .....	148
神仏混淆 .....	108
セールスポイント .....	57, 65
政策立案 .....	12, 13, 103
政策立案能力 .....	12
政策立案・問題解決能力 .....	13
生産者 .....	132
生産者の論理 .....	31, 78, 132
接近性 .....	191, 192
戦略的シナリオ .....	115
創作こけし .....	165
総社古墳群 .....	163
創造的地域多様性社会 .....	7
外湯巡り .....	45, 64

## タ 行

滞在時間 .....	124
大都市化分都市化型都市構造 .....	156, 171
滞留時間 .....	149
タウンバス .....	83
竹久夢二 .....	20, 35, 76, 77
武田信玄 .....	107
建物の街化 .....	26, 29, 44, 45, 56, 72
地域主権 .....	157
地域政策学 .....	173
地域政策形成過程 .....	14
地域の持続的発展 .....	193
地域の論理 .....	78
地域発展パラダイム .....	115
地域ブランド .....	8, 10, 192
地域ブランド化 .....	8
地区計画 .....	167
地産地消 .....	66

知識開発型観光行動 .....	39
地方分権化 .....	12, 169
駐車場 .....	60, 61, 70, 82, 89, 98, 101, 116, 127, 146, 150
駐車場の整備 .....	70
中心街再生 .....	31, 32
地理歴史回廊 .....	169
テーマ型観光 .....	109
伝統的温泉観光 .....	29
伝統的温泉観光地 .....	29, 78
伝統的建造物群保存地区 .....	186, 178
トイレ .....	78, 128, 146, 153
統一看板 .....	130, 152
東京一極集中 .....	12, 158
東京型都市開発手法 .....	82
東国文化の中心地 .....	163, 166
湯治 .....	17
湯治客 .....	29
登録有形文化財 .....	107, 118, 125
徳富蘆花 .....	19, 35, 76, 77
都市内分権 .....	157, 158
都市の本質 .....	10
土地利用規制 .....	74, 82, 118, 167, 168, 133
土地利用制度 .....	50
富岡製糸場 .....	165, 174, 188

## ナ 行

日本型リゾート .....	16
---------------	----

## ハ 行

廃仏毀釈 .....	108
白銀の湯 .....	102
バリアフリー化 .....	59, 63
榛名湖 .....	35, 99, 112, 132, 147
榛名講 .....	108, 118, 120, 125, 135
ビジター産業 .....	193
非日常空間 .....	30, 31, 43, 46, 47, 62, 72
非日常性 .....	24, 58, 64, 109, 145
ビューポイント .....	129
ヒューマンスケール .....	159, 166
風水 .....	125
風評被害 .....	77
ブランド化 .....	142
文化景観 .....	135, 175

文化資源 .....	7
文化的景観地区 .....	178, 186
分都市 .....	156

平成の大合併 .....	157
--------------	-----

防風林 .....	174, 177, 180, 181, 193
訪問面接調査 .....	67
補助金 .....	147
ホスピタリティ .....	39, 78, 132

## マ 行

町衆 .....	10, 25, 81, 113, 159, 194
まちづくり(コンパクトな) .....	8, 31

水沢うどん .....	33, 35, 75
みなかみ町 .....	11
土産物店 .....	47, 72

門前そば .....	120, 124, 136, 141, 142, 147, 148, 149
門前町 .....	106
問題解決能力 .....	13
問題発見能力 .....	12, 13

## ヤ 行

ユネスコの世界遺産 .....	173, 189
湯元 .....	38, 69

## ラ 行

ランドマーク .....	82
--------------	----

リゾート地 .....	47
リピーター .....	85, 125, 139

歴史の重層化 .....	160
--------------	-----

露天風呂 .....	35, 37, 56, 58, 64
------------	--------------------

## ワ 行

和風統一看板 .....	117
--------------	-----

著者紹介：

TODOKORO Takashi  
戸 所 隆

《略 歴》

1948年 群馬県生まれ  
1974年 立命館大学大学院地理学専攻修士課程修了  
1974年 立命館大学文学部地理学科助手  
1978年 同 助教授  
1989年 同 教授  
1996年 高崎経済大学地域政策学部教授 現在に至る  
文学博士

《専門分野》

都市地理学、都市政策学、国土構造論

《主要著書》

単 著 『都市空間の立体化』 古今書院 1986年  
(第10回日本都市学会賞受賞)  
単 著 『商業近代化と都市』 古今書院 1991年  
分 担 『ジオ・パル21』 海青社 2000年  
単 著 『地域政策学入門』 古今書院 2000年  
単 著 『地域主権の市町村合併』 古今書院 2004年  
単 著 『日常空間を活かした観光まちづくり』  
古今書院 2010年

Revitalizing Communities through Tourism

かんこうしゅうらくのさいせいとそうせい

観光集落の再生と創生

温泉・文化景観再考

発行日 ————— 2010年4月5日 初版第1刷  
定 価 ————— カバーに表示してあります  
著 者 ————— 戸 所 隆 ©  
発行者 ————— 宮 内 久



海青社  
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4  
Tel. (077) 577-2677 Fax. (077) 577-2688  
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>  
郵便振替 01090-1-17991

● Copyright © 2010 TODOKORO, T. ● ISBN978-4-86099-263-7 C0025

● 乱丁落丁はお取り替えいたします ● Printed in JAPAN

ISBN978-4-86099-958-2(PDF)